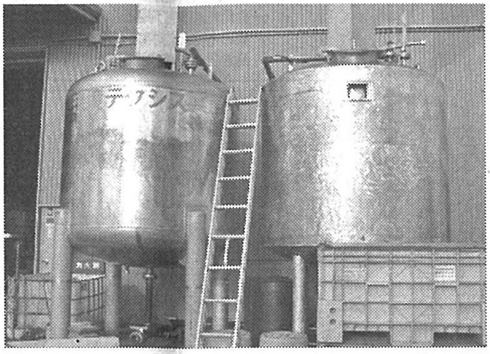
オンサイト処理システムを提案

食品廃棄物を飼料原料に

環境テクシス

出荷を待つ飼料原料



本社工場前に設置されている液状飼料化設備

食品残さの飼肥料化事業を展開する環境テクシス（愛知県豊川市、高橋慶社長、☎0533・87・5512）は、排出事業者にオンサイト処理を提案し、これまで廃棄されていた食品残さを飼料原料として販売できる仕組みづくりを手掛ける。中小の事業者でも取り組みやすく、昨今問題となっている不正転売の防止にも有効だとして好調だ。

同社は、多種類の食品残さを性状ごとに細かく分類し、最適な方法でリサイクルする独自の事業を展開している。特に飼料化に向く残さの買い取りに力を入れており、全国から集めた幅広い原料を数多く分析してきた実績を持つ。

オンサイト処理システムでは、同社の分析ノウハウを生かし、脱水・乾燥・濃縮など各現場に応じた手法を提案する。排出現場で保存処理を行うことで、食品残さを飼料原料として有効利用できるようになるだけでなく、状態が良ければ有価での取引も可能だという。

同システムによるこれまでの実績としては、食品加工工場内で脱水処理したモヤシかす年間2000㌧の他、ダイコンの加工残さ、ビールかす、おからなどがある。現在、食品製造業者からの引き合いが相次いでおり、今後もさらに取引量は伸びていく見込みだ。

高橋社長は、「工場内の衛生環境の向上も実現でき、メリットは大きい。原料となる残さの調査から機器の選定、処理物の買い取りまで、コンサルしながら顧客にフィットした一連のシステムを提示できるのが強み」と話している。

同社は、産廃と一廃処分業の両許可を保有。主力となる飼料化では日量約60㌧の処理能力を持ち、性状に応じて液状飼料と乾燥飼料につくり分けている。現在の受入量は、食品工場からの残さを中心に日量約10㌧。今後、有価での取引をさらに強化していく。

2016年3月7日　循環経済新聞